

# 異文化間オンライン言語文化交流学習（VE）とは何か？ ——用語と理論的背景，課題を中心に——

## What is Virtual Exchange?:

## Terminology, Theoretical Background and Future Issues

呉 恵卿 OHE, Hye-Gyeong

● 国際基督教大学  
International Christian University

**Keywords** 異文化間オンライン言語文化交流学習，用語，理論的背景，課題  
virtual exchange, terminology, theoretical background, future issues

### ABSTRACT

情報技術通信（ICT）の急速な発展により，教育現場でもその可能性を最大限に活用した多様で革新的な教授法が提案されている。なお，教育機関では従来の伝統的な教授法に加え，デジタル技術を教育の場に取り入れた新たなアプローチに挑戦し，新たに開発・普及している様々なデジタルツールを活用することによって学習の幅を広げている。こうしたデジタル時代の中で，COILを始めとする仮想空間での国際間または異文化間における交流や共同・協働学習を意味する「Virtual Exchanges（VE）」は，ますます国際教育の一環として自然な形で教育の場に浸透しつつある。しかしVEは，これまでにそれぞれ異なる学問分野やコンテキストで独自の導入されており，その教授法に関する用語も学問分野や地域によって多岐にわたっている。その用語の定義もそれぞれ異なっている。本研究では，VEに関するこれまでの先行研究，及びVEという用語を用いて提供されているオンラインプラットフォームに記載されている情報を概観し，VEという相互的オンライン・アプローチを指す様々な用語について記述する。また，外国語教育または言語学習の観点からVEが教授法の中でどのような位置付けを占めているのかという学問的・理論的背景について紹介する。最後に，言語教育の分野でこれまで実践されてきたVEの事例と今後の課題について述べる。

The rapid advancement of information technology communications (ICT) has spurred the emergence of diverse and pioneering teaching methodologies that fully harness their potential within the educational domain. Particularly, as OpenAI technologies like ChatGPT continue to progress, educational institutions are embarking on the endeavor of integrating these technologies into their educational environments, alongside conventional teaching methods, in pursuit of novel approaches. Moreover, educational institutions are actively promoting the utilization of a variety of newly developed and popularized digital tools to expand the horizons of learning and provide learners with comprehensive educational opportunities. In this digital era, the concept of Virtual Exchanges (VE), encompassing international and intercultural interactions and collaborative learning within virtual realms such as COIL, has seamlessly integrated itself into the landscape

of global education. However, VE has been introduced in different academic disciplines and contextual frameworks, leading to a proliferation of varied terminologies and definitions associated with its pedagogical implementation. Given these circumstances, a multitude of terms and definitions have emerged to encapsulate the essence of VE. Through a literature review, this study presents a comprehensive survey of the diverse terminologies currently employed in relation to VE and elucidates the role that VE assumes within the realm of instructional methodologies. Additionally, the study delves into the academic and theoretical underpinnings of VE within the context of language education, while also highlighting instances of VE implementation and addressing pertinent issues within the domain of language education.

## 1. はじめに

情報技術通信 (ICT) の急速な発展により、教育現場でもその可能性を最大限に活用した多様で革新的な教授法が提案されている。特に、ChatGPTなどのOpenAI技術が進化を遂げるにつれ、教育機関は従来の伝統的な教授法に加え、様々なデジタル技術を教育の場に取り入れた新たなアプローチに挑戦している。新たに開発・普及している様々なデジタルツールの活用により、学習の幅を広げ、学習者に包括的な学びの機会を提供することが可能である。このようなデジタル時代を迎え、COILを始めとするオンライン空間での国際間または異文化間交流や共同・協働学習を意味する「virtual exchange (VE)」は、ますます国際教育の一環として徐々に教育の場に浸透している。しかしVEは、これまでにそれぞれ異なる学問分野やコンテキスト、また地域において独自の導入されており、その教授法に関する用語や定義も多岐にわたっている。本研究では、VEに関するこれまでの先行研究、及びVEという用語を用いて提供されているオンライン・プラットフォームに記載されている情報を概観し、VEという相互的オンライン・アプローチを指す様々な用語について記述する。また、外国語教育または言語学習の観点からVEが教授法の中でどのような位置付けを占めているのかという学問的・理論的背景について紹介する。最後に、言語教育の分野でこれまで実践されてきたVEのモデルと今後の課題について述べる。

## 2. 異文化間オンライン言語文化交流学習<sup>1</sup> (VE) とは何か?

先行研究やウェブサイトに用いられている様々な用語を紹介する前に、本章では、VEとは何か、そして言語教育の分野においてどのような教授法またはアプローチをとっているのかについて述べる。

### 2.1 異文化間オンライン言語文化交流学習 (VE) に関連する用語

国際化の影響で労働市場が多様化し、オンラインやオフライン空間における国際間の交流やコラボレーションも増加している。このような状況を受けて、異文化間コミュニケーション能力 (intercultural communication) や世界市民教育 (global citizenship education) という概念が教育の現場で注目されている中、VEは国際教育に対するオンライン・アプローチにおいて重要な地位を占めている (Helm, 2015; Lee et al., 2022; Lewis & O'Dowd, 2016)。VEは、「コンピュータ支援言語学習 (CALL, Computer Assisted Language Learning)」または「ネットワーク基盤の言語教授法 (NBLT, Network-Based Language Teaching)」(Kern et al., 2008) の分野における遠隔コラボレーション (Helm, 2015) として、約30年の歴史を持つ教授的アプローチである。当初は主に言語学習を目的に行われ、「telecollaboration<sup>2</sup>」という用語を用いて様々な教授の実践例が報告されてきた (Belz, 2001; 2003など)。現在、言語教育以外の多様な分野においてもVEが広く実践されているが、最近では「COIL」という名称でグローバル・スタディーズ

に関わる興味深い実践例が多数報告されている (Naickera et al., 2022 など)。

ITの発展とともに教授的アプローチとして教育の現場に導入されたVEは、現在にいたるまで様々な教育分野またはコンテキストにおいて相互独立して行われてきており、それに伴い使用されている用語もそれぞれ異なっている。現在、VEを指すために使用されている用語には、「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」(Belz, 2001; Warschauer, 1996), 「オンライン文化間交流 (online intercultural exchange, OIE)」(O'Dowd, 2007; O'Dowd & Lewis, 2016), 「仮想空間での交流 (virtual exchange, VE)」(Helm, 2015), 「オンライン国際協力学習 (collaborative online international learning, COIL)」(Rubin, 2016; Schultheis Moore & Simon, 2015), 「インターネット基盤の異文化間外国語教育 (internet-mediated intercultural foreign language education, ICFLE)」(Belz & Thorne, 2006; Helm, 2015), 「グローバル・ネットワークによる学習環境 (globally networked learning environments, GNLES)」(Starke-Meyerring & Wilson, 2008), 「グローバル仮想チーム (global virtual teams, GVT)」(Clear & MacDonell, 2011; Lindner, 2016), 「Eタンデム (e-tandem)」(Kötter, 2003; O'Rourke, 2007) または「遠隔タンデム (teletandem)」(Leone & Telles, 2016) などがある (O'Dowd, 2018)。

上記に挙げた用語の多くは、言語教育または言語学習と異文化間理解を深めるためのアプローチ

として用いられてきた。ただ、「グローバル仮想チーム (global virtual teams)」とは主に経営やビジネス分野において採択されている用語で、「1つまたは複数の組織的課題を達成するために、情報通信技術によって集められた地理的、組織的、および/または時間的に分散した労働者のグループ」(Powell et al., 2004, p6) という意味で受け取られている。すなわち、様々な言語や文化、時間帯といった違いを技術を活用して乗り越えコラボレーションしようとする組織やビジネスに役立つモデルである。図1で見られるように、研究者や実践家、または教育機関によってそれぞれ異なる用語を採択してはいるが、「グローバル仮想チーム (Global Virtual Teams)」という用語以外は、(部分的にでも)言語文化教育に貢献するモデルとして機能してきた。ただ、Rubin (2016) が指摘するように、様々な用語の使用は、このようなアプローチに対する混乱を増大させる結果をもたらす可能性がある。

このように分野や目指す方向性によって様々な用語が混在して使用されてきたが、最近では図1のように前述の全ての用語を包括的に網羅し、オンライン空間でのコラボレーションや共同・協同学習または交流を広く意味する用語として「virtual exchange(VE)」が提案され用いられている。

## 2.2 VEの定義

VEという用語は、米国のニューヨークとワシントンD.C.を拠点とし、2011年にSoliya<sup>3</sup>、iEARN<sup>4</sup>、Global Nomads Group<sup>5</sup>で構成されたVirtual Exchange Coalition (VEC)<sup>6</sup>によって使用され始めたとみられる<sup>7</sup>。その後、VEは、Erasmus+Virtual Exchange活動 (initiative) を発足させた欧州評議会 (European Commission) をはじめ、この分野の様々な実践家や研究者によって広く採用されている。

用語が持つ特性上、VEはその定義も多様である。例えば、VECでは「技術を基盤にした人と人との継続的な交流<sup>8</sup>」と広く定義しているのに対し、EVOLVE (Evidence-Validated Online Learning through Virtual Exchange) プロジェクト<sup>9</sup>では、

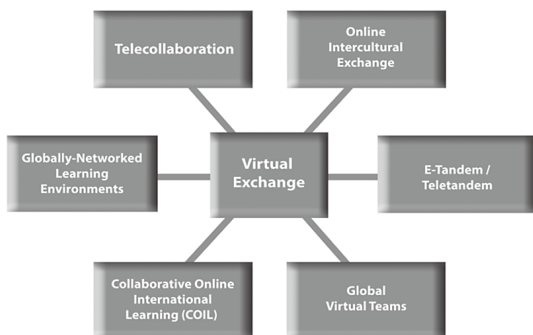


図1 仮想空間でのコラボレーションと交流 (VE) を指す用語 (O'Dowd, 2018, p4)

「地理的に離れていたり、異なる文化的背景を持つ個人やグループが、教育者または管理者 (facilitator) の支援を通じて建設的なコミュニケーションまたは相互行為を行う、技術ベースの継続的な人対人教育プログラムまたは活動<sup>10)</sup>」であると、かなり具体的に定義している。EVOLVEプロジェクトの定義によると、VEは「(正規)教育プログラムの一部または活動」として行われる特徴を持つ。

上記の定義に加えて、EVOLVEプロジェクトのホームページによると、VEは「継続的、[定期的]、[集中的な相互作用]、[新しいデジタルまたはモバイル技術の使用]、[対人的または相互作用的]、[学習者主導]、[訓練された教師や管理者の支援]、[公式または非公式の教育プログラム活動の一部]、[相互理解]という特徴を持つ。特に「相互行為性」の有無は、VEがCALLのもう1つのアプローチであるいわゆる「オンライン学習」と区別される重要な特徴である。EVOLVEプロジェクトのホームページでは、「小規模な学生グループ間の持続的な相互作用がない単純なオンライン公開講座 (MOOC<sup>11)</sup>)」、「遠隔学習」、「ソーシャル・メディア・グループの作成」、「(教師の)管理がなく、持続的でなく、構造化されていないプログラム」、「遠隔オンライン教育と類似した仮想移動性 (Virtual mobility)<sup>12)</sup>」、「1回限りのミーティングのように相互行為のための持続的な教授法に欠けたプログラム」などはVEに該当しないと明記されている。また、VEは相互理解と世界市民意識を高めるための「意味のある異文化体験」ができなければならない、オンライン空間で効果的にコミュニケーションしながら協働できるデジタル能力、外国語能力、コミュニケーション技術、メディアリテラシー、多様な文化的コンテキストで働くことができる能力など様々な能力開発を促進すると記述している。

以上、VEに関する言説をまとめると、VEとは「地理的に離れていたり、異なる文化的背景を持つ学習者グループが、教育的プログラムの一環として、教師や専門家または実践家の指導のもと、オンラインによる異文化間相互行為と共同または

協働プロジェクトを通じて継続的に交流を行うこと」であると言える。しかし、EVOLVEプロジェクトの厳密な定義とは別に、VEは「教育プログラムの一環として他の文化圏のパートナーとオンラインを通じて行われる共同学習または協働学習に参加する様々なアプローチ」を指す包括的な用語として使用されるのが一般的である。なお、VEは公式または非公式の教育機関の両方で行われることができ、学校外の機関や団体または彼(女)らが提供するオンライン・プラットフォームを通じて行われることもあるが、一般的には学校教育に統合され正規の教育プログラムの一部として行われることが多い。また、オンラインで行われる異文化間協働学習に対してVEという用語の使用が提案されているにもかかわらず、実務者の教育的焦点や学問分野のコンテキストによって依然として様々な用語が混在して使用されているのが現状で、このような流れは当分続くことと見込まれる。

## 2.3 VEとCOIL

VEを正規のカリキュラムに付属する補助的な手段としてアプローチするのではなく、単位を認め、正規の教育プログラムに統合させようとする試みが継続して行われてきた (Dooly, 2016; Hauck & MacKinnon, 2016)。その代表的なものが、最近日本の大学で注目を集めているCOILである。COILは、共通のシラバスを通じて異なる大学に在学している学生が、互いに共有された科目内容を学習し、特定の科目に対する多様な文化的視点を提供しながら、異文化間能力 (intercultural competence) と批判的思考能力 (critical thinking) を高めるためのプロジェクト授業を指す (Rubin, 2016)。

カリキュラムの一部として共同プロジェクトやディスカッションのために様々な国の学生と教員をつなぐCOILは、最近、米国、日本、韓国をはじめ、世界的に広がっている<sup>13)</sup>。グローバル・スタディやビジネス、工学など様々な学問分野で試みられており、言語学習そのものが目的というよりは、特定の言語を媒介にして共同プロジェクト



を行うことが主な内容となっている。日本語やその他の外国語を媒介して行われる COIL もあるが、ほとんどの COIL は英語を媒介として行われている。現在、多くの日本の大学では「グローバル人材育成」を掲げ、英語スキル向上のために COIL を積極的に導入する傾向にある。

現在広く普及されている COIL モデルは、ニューヨーク州立大学 (SUNY) の COIL センターでの経験をもとに、John Rubin と彼の同僚たちによって 2004 年に開発されたものである (Rubin, 2016)。図 2 に示すように、COIL では、異なる国にある類似したコース内容の 2 つ以上のクラスをつなぎ合わせることで交流を行う。パートナー大学の教員たちは、異なる 2 つの学生集団が互いにコミュニケーションを行い、コラボレーションができるようにコース・モジュールを設計する。2 つのグループの学生は、授業で用いる資料について議論したり、実習問題を一緒に解決したり、採点可能な成果物を作成したりするなど、共同または協働作業を行う。共同作業は同期 (リアルタイム) または非同期 (非リアルタイム) で行われ、学生は電子メール、音声、ビデオ、またはこれらのツールを組み合わせることで連絡を取り合う<sup>14</sup>。図 1 では、COIL を VE の下位カテゴリーに分類しているが、COIL の主観団体や実行者は VE という用語を使用せず、COIL という用語を使用して差別化を図っているとみられる。

それでは、上記で述べた VE と、アメリカと日

本を始め世界中に広がっている COIL の違いは何だろうか？ 前節で述べたように、VE は「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」という用語で、主に外国語学習の場において言語交換学習の形で導入され発展されてきた。このような背景から、VE は外国語学習において異文化間体験の場を提供し、それによって様々な文化的経験や解釈を検討することに重点が置かれている。これに対して COIL は、共有された講義計画書を作成し、それに基づいて共同プロジェクトを進めることにより重点を置いている。ただ、VE という用語を使ったプロジェクトも、COIL という名称で行われるプロジェクトも、実は様々な形で行われているのが現状である<sup>15</sup>。

最近、COIL は最も大きな VE ネットワークの 1 つとして急成長しており、前述したように日本をはじめとする多くの大学が先を争ってグローバル能力強化及び英語熟練度を高めるための戦略の 1 つとして力を注いでいる。なお、SUNY COIL グローバルネットワーク<sup>16</sup>は現在、情報およびアイデアの交換、専門的支援、パートナーマッチングおよびリソース共有のためのハブの役割を果たしている。また、SUNY COIL センターのホームページには、COIL 方法論に関連、学生と教員を世界中の同僚とつなげてオンライン共同作業ができる機会を教室にもたらし、すべての学生がグローバル学習に「公平に」アクセスできるようにするために開発されたと明記されている<sup>17</sup>。しかし、実際に COIL という名称を使用して行われた実践例を見ると、「共有された講義計画書」の下で行われた厳密な意味での COIL ではなく、様々な形態の「異文化間オンライン協同授業」を指す用語として使用される場合が散見される。現在、「異文化間オンライン協同授業」を指す用語として、外国語教育分野の論文では VE のほか、「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」や「E タンデム (e-Tandem)」が、グローバルスタディーズやビジネスのようなその他の分野では COIL が広く使われる傾向にある。ただ、日本や韓国の場合は COIL の認知度が高く、分野に関係なく COIL という用語が広く用いられている。

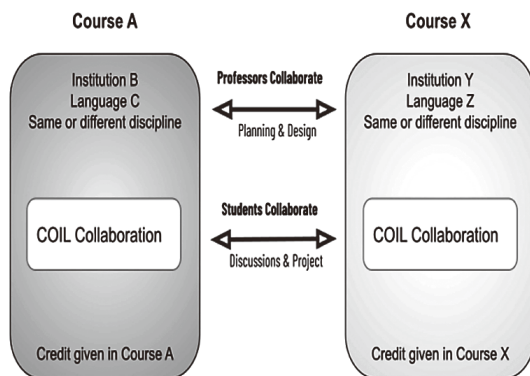


図 2 COIL の交流方式 (<https://coil.suny.edu/>)

### 3. VEの理論的背景

前述のように、VEは当初「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」という名称で、主に外国語領域で言語習得や異文化間能力を高めるためのアプローチとして行われてきた。教室で学んだ外国語を目標文化圏の話者と交流しながら実際に使ってみる機会を提供し、それによって言語能力の向上を図ろうとする試みであったとみられる。本章では、VEが外国語教育または言語習得においてどのような背景を持っているのかについて述べる。

異文化間パートナーとの相互行為による言語習得という点で、VEはVygotsky (1978) や Blumer (1969) の相互行為的理論に基づいた教授法といえる。Vygotsky (1978) の社会文化的理論 (Sociocultural Theory) によると、個人の学習と発達は彼(女)らを取り巻く社会的、文化的環境と相互作用するプロセスの中で形成される。学習者は自分を取り巻く言語及び文化を通じて社会的な意味を習得し、自分たちが属する社会の人々と知識や能力を共有しながらそれを発展させていく。VEは、学習者が異なる言語や文化を持つ人々と相互作用し、それを通じて社会的意味を共有し形成する機会を提供するという点で、社会的相互作用とコミュニケーションの重要性を強調する。また、Blumer (1969) の象徴的相互作用論 (symbolic interactionism) によると、言語習得は個別に行われるのではなく、周辺環境や状況との相互作用を通じて行われる。したがって、言語が使用され、交渉される社会的・文化的コンテキストは、学習者が社会的意味を交換し共有する重要な環境である。学習者は言語的相互行為を通じて「状況の意味論」を理解できるようになり、これは言語習得において必須要素である。VEは、他の国や文化圏の人々と様々なオンライン・プラットフォームを通じてコミュニケーションまたは共同学習や作業のコラボレーションを行い、そのプロセスの中で学習が行われているという点で、個人的、文化的、社会的相互作用が同時に行われる学習メカニズムを持っているといえる。

以上のことから、言語教授法としてのVEが最終的に目指すのは、異なる文化的背景を持つ人々と効果的にコミュニケーションし相互作用する能力を開発・強化すること、すなわち異文化間コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence)<sup>18</sup>の向上であるといえる。また、この能力を高めるためにVEが採用する教授法は、プロセス中心アプローチ (Byram, 1997; Byram & Zarate 1994; Deardorff, 2006; Gardner, 1985; Wright, 2000) である。プロセス中心アプローチは構成主義 (Vygotsky, 1978) の観点を活用した教授の実践であり、結果中心アプローチ (product-based approach) と対比される概念である。つまり、学習者は社会的、相互行為のプロセスに積極的かつ能動的に参加することで、教師から学んだ学習内容を自分の内面で再概念化 (reconceptualization) する過程を経ることになるが、このような個人の実践と経験こそが効果的な学習過程である (Ohe, 2018; 呉, 2020; 2022)。このような認識は、異文化間コミュニケーション能力を研究する学者の間で共通しており、彼(女)らにとって教室は、異文化を習得し体験する「経験」の場であると描写される (Byram, 1997; Deardorff, 2006; Moloney & Harbon 2010, Murray & Bollinger, 2001)。

### 4. 外国語教育におけるVEモデル

第2章と第3章では、VEという用語と定義について概観し、その理論的背景について述べた。前述したとおり、外国語教育の分野において最も長く用いられている用語は「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」(Belz, 2003, Guth & Helm, 2010; Lee, 2009など) である。VEという用語が統一的に使われつつある今でもまだ「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」という用語を使った研究が発表されており、「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」こそ最も適切な用語だと主張する研究者もいる (Dooly & Smith, 2020)<sup>19</sup>。その他、オンライン文化間交流 (online intercultural exchange, OIE) (O'dDowd & Lewis, 2016)、Eタンデム (e-tandem) (O'Rourke, 2007, 脇坂, 2013な

ど)、遠隔タンデム (teletandem) (González & Nagao, 2018; Leone & Telles, 2016) などの用語も前述の通り、外国語教育におけるVEの研究で長い間用いられてきた。これらの研究は、VEが外国語能力および異文化間コミュニケーション能力、デジタル能力にどのような影響を与えているかということを探求することに主に重点を置かれ、学習者の母語と目標言語 (target language) など二重言語を使用して行われた交換言語学習の形のVE実践例が多い (Helm, 2015; O'Dowd, 2018)。本章では、外国語教育の分野におけるVEのモデルやプロジェクトにはどのようなものがあるのか、先行文献を参考にしながらいくつか紹介する。

#### 4.1 Eタンデム (e-tandem) モデル

「Eタンデム」とは、オンライン上で行われる言語交換または言語協同学習を総称する用語で、ITとデジタル・コミュニケーション・プラットフォームの発展とともに世界各地で自然に作られ、大学でも「e-tandem」または「language buddy」などの名称でプログラムを支援している (Ohe, 2016)。主に、言語学習に重点が置かれている。一般的に、異なる言語的背景を持つ2人の個人が一緒に協力し、それぞれの目標言語を学ぶためにコミュニケーションを行う行為である (O'Rourke, 2007)。最も古い「Eタンデム」形式の交流には、異文化間メール教室接続 (Intercultural Email Classroom Connections, IECC<sup>20</sup>) などがある。IECCは、地理的に離れた国または地域の学生が電子メール交換を通じて相互文化交流と理解を促進するための教育プログラムである。

「タンデム」という用語は、もともと異なる母語を持つ2人が会って互いの言語でコミュニケーションする言語交換の学習方式を指すが、これがオンラインを通じて行われるようになり、「Eタンデム」という用語が登場した。教授法としての「Eタンデム」は「制度化したオンライン・タンデム学習の1つの形態」(Kötter, 2003)で、主にメールや、ビデオ通話、チャット・アプリケーション、言語交換サイトなどのデジタル・プラットフォームを通じた相互コミュニケーションの形で

行われる。学習者は、目標言語を使って異文化間交流をする機会を得ると同時に、交流パートナーの言語教師の役割を果たし、フィードバックを提供したりエラーを修正したり自分の言語と文化についての洞察を共有したりする (Bower & Kawaguchi, 2011)。学習者の自律性が非常に重視される教授法で (O'Rourke, 2007)、現在も様々なオンライン・プラットフォームが存在し、関連研究も盛んに行われている。個人間の交流モデルである「Eタンデム」は、デジタル技術の発展によってプロジェクトの種類も多様化してきている。

#### 4.2 Culturaモデル

「Culturaモデル」は、FurstenbergとMITが合同で開発したモデルで (Furstenberg et al., 2001) は、外国語を学ぶ学習者が自分の文化と目標言語の文化を比較し、類似点や相違点を自ら発見し、比較的な観点から分析を行うことによって、学習者の言語能力に加えて異文化間コミュニケーション能力をも高めることを目的とするプロジェクト・モデルである。このモデルの協働プロジェクトでは、自分の母語と目標言語で作成されたテキストや映画、またはアンケート調査といった資料を用いて相互比較を行う。

「並列テキスト (Parallel texts)」はこのモデルの有効な手法である。「並列テキスト」とは、言語学習のために2つ以上の言語で書かれたテキストを並べて比較する技法のことである。特定の物語やテーマについて文化的に異なる言語表現が提示されるため、学習者は異なる言語で書かれたテキストを相互比較しながら読むことになる。しかし、「並列テキスト」の教育目標は、両言語の言語的な違いを単純に認識するということより、その違いが言語的にどのように構成されているのかを学習者が自ら調べることである。また、学習者はその違いによる社会的・歴史的要素を探求したり、他者の目を通して日常生活の営み方を想像したり、他者が自分の文化をどのように評価しているのかについて批判的な (critical) 観点から考えたりすることによって、目標文化に対する学習者の洞察力、または異文化間感受性 (intercultural

sensitivity) を強めることができる (Belz, 2005)。このモデルの最終的目標は、学習者の言語能力だけでなく、比較するテキストの言語および文化的側面に対する理解を深めることによって、異文化間コミュニケーション能力を高めることである (Belz, 2002<sup>21</sup>; Schmidt, 1990)。Byram (1997) によれば、このような教育目標は、学習者に自分のアイデンティティについて当たり前とされている言語を相対的に理解させ、そのアイデンティティが文化的・社会的に構築されたものであるということ認識させることができる。

さらに「並列テキスト」技法では、教師が文化的な違いを知識の一部として説明するのではなく、学習者が相互行為を通して経験的且つ主体的に発見することを目指す。したがって、VEの参加者はパートナーと共同で同じテキストを読み、相互ディスカッションを通して知識や学習の再概念化を行い、それによって文化的洞察力を養う機会を得ることになる。このモデルは、他者性 (otherness) と呼ばれる文化の複雑な側面を可視化し、アクセス可能なものにするという面で効果的な技法である (Furstenberg et al., 2001)。

O'Dowd & Ware (2009) や O'Dowd (2011) では、これと似通ったものを「混合型異文化間モデル (blended intercultural model)」と名付け、このモデルで有効なプロジェクトの類型を以下の3つのカテゴリに分けて提示している。

- (1) 情報交換：VEに参加した学習者が互いに知識や情報を提供すること
- (2) 比較及び分析：「並列テキスト」技法のように、母語と目標言語の両方で書かれた本や映画の字幕、新聞など様々なテキストをVE参加者が一緒に読んで比較したり批判的に分析を行うこと
- (3) コラボレーション及び共同作業による作品制作：ウェブページやブログの共同制作、または共同プレゼンテーション、翻訳など。

上記のプロジェクトは、言語学習と異文化間コミュニケーション能力というVEの目標を達成す

るにあたって、オンライン上での聞き・話し・読み・書きといった4機能を全て統合した形で構成されている。コラボレーションの複雑性から見ると、上記の情報交換が最もシンプルで、共同作業による作品制作が最も複雑な類型となっている。

前節で紹介した「e-タンデム」が主に目標言語の学習や能力の強化に焦点が当てられているのに対し、「Culturaモデル」または「混合型異文化間モデル (blended intercultural model)」は、言語教育に加え異文化間感受性または異文化間コミュニケーション能力を高めることに重点が置かれている。なお、「e-タンデム」では教師の役割は最小限にされ、学習者の自律性は最大限に求められるのに対し、後者のモデルではプロジェクトの企画や実施における教師の役割が極めて重要である (O'Dowd, 2018)。

## 5. VEの限界及び課題

現在、VEはまさにプラットフォームの全盛期と言われるほど様々なプラットフォームが続々と登場している。しかし、これらのプラットフォームの多くはアメリカやヨーロッパに基盤を置いており、英語を媒介とした交流または英語と他の外国語との交流研究がほとんどである。最近、ヨーロッパ評議会の研究助成金を受けて開発された UNICollaboration が登場して以来、ヨーロッパの言語を媒介にした交流や研究事例も急速に増加している。英語のほか、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語の実践例も紹介されているが、Belz (2003) でも指摘するように、アジアの言語を含め非人気外国語教室におけるVEの実践例はまだ少ない。日本では、英語以外に日本語を媒介とした COIL 型 VE が報告されつつあるが (森山, 2019 など)、まだ十分であると言えない。特に、アジア言語間の「遠隔コラボレーション (telecollaboration)」型言語交換交流授業の実践事例は極めて少ない。外国語教育が英語に偏っているのもその原因の1つであるだろう。特に韓国や日本の大学の外国語授業の場合、教養授業の1つとして提供される初級レベル<sup>22</sup>の言語授業が大半



を占めている。これらの教養授業は、全学共同カリキュラムに従っており、言語的な限界のため、実質的に実施が可能なプロジェクトも制限される。これらの要素を考慮すると、2章で定義した厳密な意味でのVE、または相対的に複雑で長期的なプロジェクトを実践することは難しい。

VEに対する教師の認識不足も、外国語教室でVEが導入されることを阻害する要素である。したがって、大学で提供される様々な外国語教室でVEが導入され、実践されるためには、VEに対する教師の認識を高め、それに加えて、よりアクセスや実践が容易なVEモデル、あるいは日本の大学における教養外国語教育の現実を反映したVEモデルを提示する必要がある。なお、VEに対する教師の認識を高め必要な知識を共有するためにワークショップなどを開催し、実践例または実践モデルが共有できるオンライン・プラットフォームの開発及び構築を行うことも必要であろう。

## 注

- 1 本稿では、読者の理解を助けるために、VEが意味することを最大限に生かした形の翻訳を採用している。
- 2 Belz & Thorne (2005) によると、テレコラボレーションとは、国際的に離れた学習者が、言語の授業で教師などの専門家と一緒にインターネットのコミュニケーションツールを使用して、社会的相互作用、会話、議論、文化交流をサポートするために、電子メールや同期的なチャットを使用することを指す。
- 3 2003年にLucas WelchとLiza Chambersが作ったVEのためのオンラインプラットフォームで、青少年を対象に4週間から8週間にわたる様々な異文化交流プログラムを実施している。欧米とイスラム世界の文化的認識の違いに関心のある人を対象としたプログラムも用意されており、世界の様々なグローバル問題について一緒に議論しながら、コミュニケーション能力及び異文化間能力の向上を目指す (<https://soliya.net/>)。
- 4 1988年に設立された非営利団体で、140カ国、3万以上の学校と青少年団体を含む規模に成長した。現在、約200万人以上の学生と5万人以上の教育者が参加し、世界市民養成を目的としたグローバル・ネットワークの1つとして、初等及び中等教育のためのVE環境を構築している (<https://www.learn.org/>)。
- 5 1988年に開設されたオンライン・プラット

フォームで、青少年が直接作ったオンライン講座、コンテンツ制作インターンシップ、ディスカッション・プラットフォーム、イベントなどを開催するデジタルコミュニケーション空間である。対話を通じて文化的障壁を取り除き、グローバルな問題に対して一緒に対処していくことを目指しており、様々なプログラムを実施している (<https://gng.org/>)。

- 6 結成された当初は、「Exchange 2.0 Consortium」という名前を用いていたが、後日「Virtual Exchange Coalition」という名前を用いて「virtual exchange」という用語を前面に出し始めた。この団体では、VEの効果や影響を測定・評価するためにMITと共同作業を行っている (<http://virtualexchangecoalition.org/wp-content/uploads/2014/12/DRAFT-Exchange20-MIT-summary-2.pdf>)。
- 7 <https://www.eaie.org/blog/virtual-exchange-iah-terminology.html>。
- 8 <http://virtualexchangecoalition.org/>。
- 9 EUの高等教育に対する新しい戦略のための未来志向の協力プロジェクトの一環として、EUから資金を受け、2018年から2020年まで実施されたプロジェクトである。
- 10 <https://evolve-erasmus.eu/about-evolve/what-is-virtual-exchange/>。
- 11 MOOCの場合、一方的にインターネット講義や授業資料などを無料で提供するオープン・ウェア・コース (open course ware (OCW)) とは異なり、一定の費用を支払えば教授者からフィードバックを受けることができ、大学と連携して相互行為的な学習も可能であるという点で、一方的とは言い難い側面が存在する。相互行為性を完全に排除することはできないが、教師の指導の下で行われる学習者間のコラボレーションではないという点で、VEとは本質的に異なるアプローチといえる。
- 12 学生がオンライン・ツールとプラットフォームを使用して、物理的に家を離れることなく、他の教育機関のコースを受講することで、現地に直接行くことまたは他の教育機関で「海外留学」をすること、または単に「国境を越えて」異文化間学習を行うと主張することを指す。
- 13 <https://coil.suny.edu/>。
- 14 <https://nafsatechmig.com/resources/coil/>。
- 15 Schultheis Moore and Simon (2015) では、様々なCOILという名称で実施されたプロジェクトの実践例を報告している。これらの中には完全にオンラインで行われるものもあり、オンライン・オフラインが混在するプログラムもある。また、講義計画書と課題が相互に同一のコースもあれば、特定の課題1つだけと一緒に作業するプロジェクトもあり、SUNY COILモデルと異なる形態も共存している。
- 16 SUNY COILセンターによると、COILはニューヨーク州立大学のサービスマークであり、使用条件に

同意する場合に限り COIL の名前を使用できると明記されており、教育機関に対して、カリキュラム国際化のための戦略的計画、戦略計画の実行スケジュールと支援、授業設計と開発に関する1対1の相談、評価計画、コースとプログラムの実行評価、オーダーメイドの専門性開発および教育など、オーダーメイドのコンサルティングサービスを提供している。

- 17 <https://coil.suny.edu/about-suny-coil/>。
- 18 異文化間コミュニケーション能力を構成する要素には、異文化に対する好奇心とオープンマインド、多様な社会現象や相互行為過程についての知識、異文化の多様なコミュニケーションを解釈し、自分の文化と関連づけることができる能力、さらに自分と他者の文化を批判的に評価できる能力などが含まれる (Byram 1997)。
- 19 彼女は、「距離的に離れた人々が技術的につながって (tele)」「コラボレーション (collaboration)」をするという「telecollaboration」こそその意味を最もよく表しており、「仮想空間での交流」と直訳される VE という用語は、その意味をすべて反映していないと主張する。
- 20 1992年に米国の St. Olaf College の教授たちによって開発・普及された最初の「マッチング」サービスである。大学だけでなく、小中高レベルの外国語教室で国内の他の地域または他の文化圏の学習者との電子メール・パートナーシップ構築のために IECC メーリング・リストを無料で運営・配布し、世界的に大きな人気を得た。
- 21 テキストと映画の異文化間読解を通じて、外国語能力と異文化間認識を開発するための一連のプロジェクトを実施した。映画や文学作品に対する「並列テキスト」の手法を活用している。
- 22 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠「Common European Framework of Reference for Languages, CEFR」の A1・A2 レベルに該当する。

## 引用文献

- Belz, J. (2001). Institutional and individual dimensions of transatlantic group work in network-based language teaching. *ReCALL*, 13(2), 213-231. <https://doi.org/10.1017/S0958344001000726a>.
- Belz, J. (2002). Social dimensions of telecollaborative foreign language study. *Language Learning & Technology*, 6(1), Retrieved from 60-81. <http://www.iltjournal.org/item/2373>.
- Belz, J. (2003). Linguistic perspectives on the development of intercultural competence in telecollaboration. *Language Learning & Technology*, 7(2), 68-99. Retrieved from <http://ilt.msu.edu/vol7num2/BELZ/default.html>.
- Belz, J. (2005). *Telecollaborative language study: A personal overview of praxis and research*. Selected Papers from the 2004 NFLRC Symposium. Retrieved from <http://nflrc.hawaii.edu/networks/nw44/belz.htm>.
- Belz, J., & Thorne, S. (Eds). (2006). *Internet-mediated intercultural foreign language education*. Boston: Heinle and Heinle.
- Blumer, H. (1969). *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. University of California Press: London.
- Bower, J., & Kawaguchi, S. (2011). Negotiation of meaning and corrective feedback in Japanese/English eTandem. *Language Learning & Technology*, 15(1), 41-71. Retrieved from <http://ilt.msu.edu/issues/february2011/bowerkawaguchi.pdf>
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Byram & G. Zarate. (1994). *Definitions, Objectives and Assessment of sociocultural competence*. Strasbourg: Council of Europe.
- Clear, T., & MacDonell, S.G. (2011) Understanding technology use in global virtual teams: research methodologies and methods, *Information and Software Technology* 53(9), pp.994-1011. doi: 10.1016/j.infsof.2011.01.011.
- Deardorff, D.K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence. *Journal of Studies in International Education*, 10 (3), 241-266.
- Dooly, M. (2016). 'Please remove your avatar from my personal space': competences of the telecollaboratively efficient person. In R. O'Dowd & T. Lewis (Eds), *Online intercultural exchange: policy, pedagogy, practice* (pp. 192-208). Routledge.
- Dooly, M., & Smith, B. (2020). Telecollaboration and virtual exchange between practice and research: a conversation. *Journal of Virtual Exchange*, 3(S1), 63-81. <https://doi.org/10.21827/jve.3.36085>.
- Furstenberg, G., Levet, S., English, K., & Maillet, K. (2001). Giving a virtual voice to the silent language of culture: The Cultura project. *Language Learning & Technology*, 5(1), 55-102. <http://dx.doi.org/10125/25113>.
- Gardner, R. C. (1985). *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Attitudes and Motivation*. London: Edward Arnold.
- González, S., & Nagao, K. (2018). Collaborative learning through Japanese-Spanish teletandem. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 9(2), 196-216. <https://doi.org/10.37237/090210>.
- Guth, S., & Helm, F. (Eds). (2010). *Telecollaboration 2.0: language, literacies and intercultural learning in the 21st Century*. Peter Lang. <https://doi.org/10.3726/978-3-0351-0013-6>.

- Helm, F.(2015). The practices and challenges of telecollaboration in higher education in Europe. *Language Learning & Technology*, 19(2), 197-217. Retrieved from <http://llt.msu.edu/issues/june2015/helm.pdf>
- Hauck, M., & MacKinnon, T. (2016). A new approach to assessing online intercultural exchange: open badges for soft certification of participant engagement and task execution. In R. O'Dowd & T. Lewis (Eds), *Online intercultural exchange: policy, pedagogy, practice* (pp. 209-234). Routledge.
- Kern, R., Ware, P., & Warschauer, M. (2008). *Network-based language teaching*. In N. H. Hornberger (Ed.), *Encyclopedia of language and education* (pp. 1374-1385). Springer. [https://doi.org/10.1007/978-0-387-30424-3\\_105](https://doi.org/10.1007/978-0-387-30424-3_105)
- Kötter, M. (2003). Negotiation of meaning and codeswitching in online tandems. *Language Learning & Technology*, 7(2), 145-172. Retrieved from <http://llt.msu.edu/vol7num2/pdf/kotter.pdf>
- Lee, J., Leibowitz, J., & Rezek, J. (2022). The Impact of International Virtual Exchange on Participation in Education Abroad. *Journal of Studies in International Education*, 26(2), 202-221. <https://doi.org/10.1177/10283153211052777>
- Lee, L. (2009). Promoting intercultural exchanges with blogs and podcasting: a study of Spanish-American telecollaboration. *Computer Assisted Language Learning*, 22(5): 425-443.
- Leone, P., & Telles, J. A. (2016). The teletandem network. In R O'Dowd & T. Lewis (Eds), *Online intercultural exchange: policy, pedagogy, practice* (pp. 241-247). Routledge.
- Lindner, R. (2016). Developing communicative competence in global virtual teams: a multiliteracies approach to telecollaboration for students of business and economics. *CASALC Review*, 1, 144-156.
- Moloney, R., & Harbon, L. (2010). Making intercultural language learning visible and assessable. In B. Dupuy, & L. Waugh (Eds.), *Proceedings of Second International Conference on the Development and Assessment of Intercultural Competence* (Vol. 1, pp. 281-303). University of Arizona Press.
- 森山新 (2019) 「日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割」『人文科学研究』15, 121-134.
- Murray, G. L., & Bollinger, D. J. (2001). Developing Cross-Cultural Awareness: Learning Through the Experiences of Others. *TESL Canada Journal*, 19(1), 62-72. <https://doi.org/10.18806/tesl.v19i1.920>
- Naickera, A., Singha, E., and van Genugten, T. (2022). Collaborative Online International Learning (COIL): Preparedness and experiences of South African students. *Innovations in Education and Teaching International*, 59(5), 499-510.
- O'Dowd, R. (2006). *Telecollaboration and the development of intercultural communicative competence*. Berlin: Langenscheidt.
- O'Dowd, R. (Ed.) (2007). *Online intercultural exchange: An introduction for foreign language teachers*. Clevedon: Multilingual Matters.
- O'Dowd, R., & Ware, P. (2009). Critical issues in telecollaborative task design. *Computer Assisted Language Learning*, 22(2), 173-188.
- O'Dowd, R. (2011). Online foreign language interaction: Moving from the periphery to the core of foreign language education? *Language Teaching*, 44(3), 368-380.
- O'Dowd, R., & Lewis, T. (Eds). (2016). *Online intercultural exchange: policy, pedagogy, practice*. Routledge.
- O'Dowd, R. (2018). From telecollaboration to virtual exchange: state-of-the-art and the role of UNICollaboration in moving forward. *Journal of Virtual Exchange*, 1, 1-23.
- Ohe, HG. (2016). Cultivating Intercultural Communicative Competence in Liberal Arts Institutions. In: Jung, I., Nishimura, M., Sasao, T. (Eds) *Liberal Arts Education and Colleges in East Asia. Higher Education in Asia: Quality, Excellence and Governance* (pp. 137-150). Springer, Singapore.
- Ohe, HG. (2018). Technology-Enhanced Approaches to the Development of Intercultural Sensitivity in a Collaborative Language Program: A Japanese-Korean Case. In M. Nishimura, & T. Sasao (Eds.), *Doing Liberal Arts Education* (pp. 61-74). Springer: Singapore.
- 吳惠卿 (2020) 「異文化間コミュニケーション能力を高める外国語教室づくり—ICTを活用した日韓交流授業を事例に—」『日本文化研究』73, 261-281.
- 吳惠卿 (2022) 「日韓の外国語教室におけるバーチャル型国際間交流授業の実践と課題—言語運用能力と異文化間コミュニケーション能力に与えた影響を中心に—」『ICU日本語教育研究』18, 3-19.
- O'Rourke, B. (2007). Models of telecollaboration (1): eTandem. In R. O'Dowd (Ed.), *Online intercultural exchange* (pp. 41-61). Clevedon, GB: Multilingual Matters.
- Powell, A., Piccoli, G. and Ives, B. (2004) Virtual Teams: A Review of Current Literature and Directions for Future Research. *Database for Advances in Information Systems*, 35, 6-37. <https://doi.org/10.1145/968464.968467>.
- Rubin, J. (2016). The collaborative online international learning network. In R. O'Dowd & T. Lewis (Eds), *Online intercultural exchange: policy, pedagogy, practice* (pp. 263-272). Routledge.
- Schultheis Moore, A., & Simon, S. (2015). *Globally*

- networked teaching in the humanities*. Routledge.
- Schmidt, R. (1990) The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11, 129-158.
- Starke-Meyerring, D., & Wilson, M. (Eds). (2008). *Designing globally networked learning environments: visionary partnerships, policies, and pedagogies*. Sense Publishers.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Massachusetts: Harvard University Press.
- 脇坂真彩子. (2013). 「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた 要因」『*阪大日本語研究*』25, 105-135.
- Warschauer, M. (Ed.). (1996). *Telecollaboration in foreign language learning*. Honolulu, HI: University of Hawai'i Second Language Teaching and Curriculum Center.
- Wright, D. A. (2000). Culture as information and culture as affective process: A comparative study. *Foreign Language Annals*, 33 (3), 330-341.